

旧第一国立銀行外観復元についての歴史的考察

清水 慶 一

国立科学博物館 工学研究部

A Historical Consideration on the Original Style of The First National Bank

By

Keiichi SHIMIZU

Department of Engineering, National Science Museum, Tokyo

Abstract

The modernization of Japanese architecture following the Meiji Restriction meant, in effect, the gradual adoption of Western styles and methods. At the beginning of the Meiji Era Japanese architects made notable experiments in Western style. Full-fledged construction in such foreign materials as brick was of course impossible for the early Japanese architects, and they compromised with exploiting the exotic elements of Western architecture, while employing materials easily obtainable in Japan. The First National Bank was the most characteristic building among these semi-foreign style of that time.

This building was planned by Kisuke SHIMIZU II (1872), and representative of the best of the early Western-style employed by the Japanese. But, at the end of the Meiji Era, this Building was destroyed.

The aim of this paper is to make clear how the First National Bank was designed. To achieve this purpose, several new historical materials of this building, which were discovered in Mistui Bunko by Toru Hastuta, was used to reconstruct this building.

1. 復元の目的

旧第一国立銀行（明治5年竣工，竣工時海運橋三井組為替座御用所）は、『明治工業史』¹⁾にも、

「この第一国立銀行の前身にして、(中略) 清水喜助の設計施工せしものにして、一新機軸を出したる円熟せる好設計なりき。而も独特の手腕より成り、毫も外国人の手を借りたる事なかりき。……(中略)……当時諸職工は洋風彫刻其の他に熟練せしもの皆無なりしを以て設計者の苦心は察するに余りありしならん。」

と記されるように、本格的な西洋建築が日本に導入される以前、日本人工匠の手で建てられた最初期の洋風建築であった。未だ江戸期の町並であった東京に出現したこの建物は人々を驚かせるに充分なものであった。この西洋風建物は将に文明開化の象徴であった。このようにこの建物は最初期の洋風

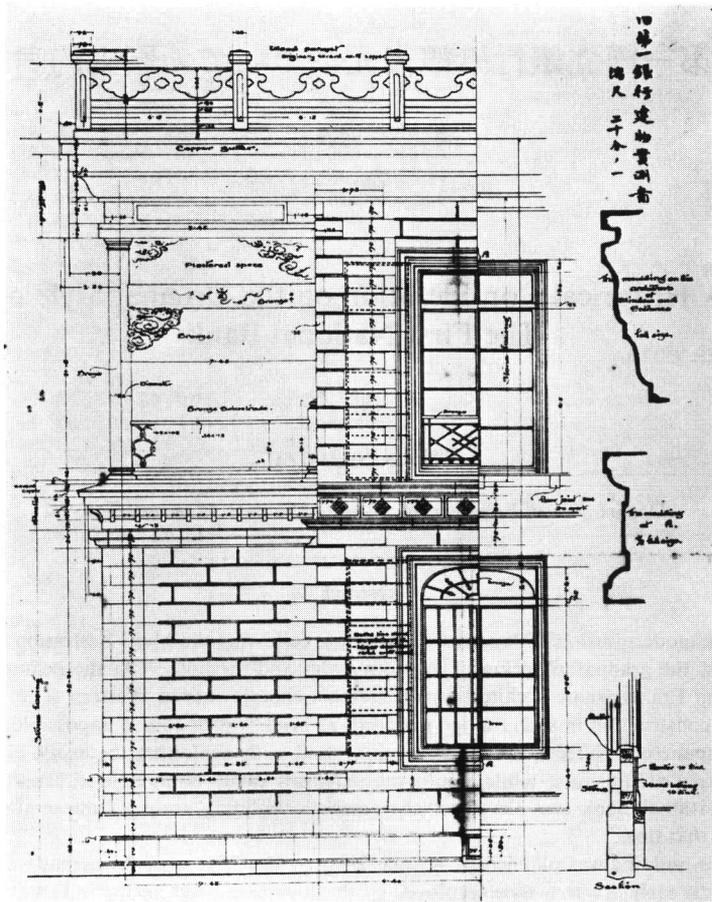


図1 森山松之助実測詳細図

建築として日本の近代建築史上きわめて重要な位置を占めている。²⁾しかし、明治31年頃惜しくも取り壊された。当時より保存を望む声はあったが、かなえられず、取り壊しにあたって、森山松之助による実測が行われ、『建築雑誌』上に発表された。³⁾(図1)現在ではこの実測図が貴重な記録となっている。近代日本建築史の研究が進むにつれ、この建物の歴史的重要性が再認識され、昭和初期、堀越三郎によってこの建物の復元図が作製された。⁴⁾(図2)これは、前記森山の実測図を基にし、当時としては出来得限りの資料を集め、竣工時の姿を復元したものであった。最近までこの堀越の復元案が第一国立銀行について最も信頼すべき資料と考えられていた。⁵⁾

しかし、近年初田亨によって、この建物に関する根本資料が数多く発見され、竣工時の姿がより一層明瞭にすることができるようになった。⁶⁾本研究ではこの初田発見の資料に基づき、近代日本建築史上きわめて重要な位置にある第一国立銀行の竣工時の姿を出来得限り正確に復元し、あわせて日本人工匠の西洋建築の導入の方法を知るを目的としている。なお本復元はこの建物の最も特徴的な、外観意匠を中心として行った。⁷⁾

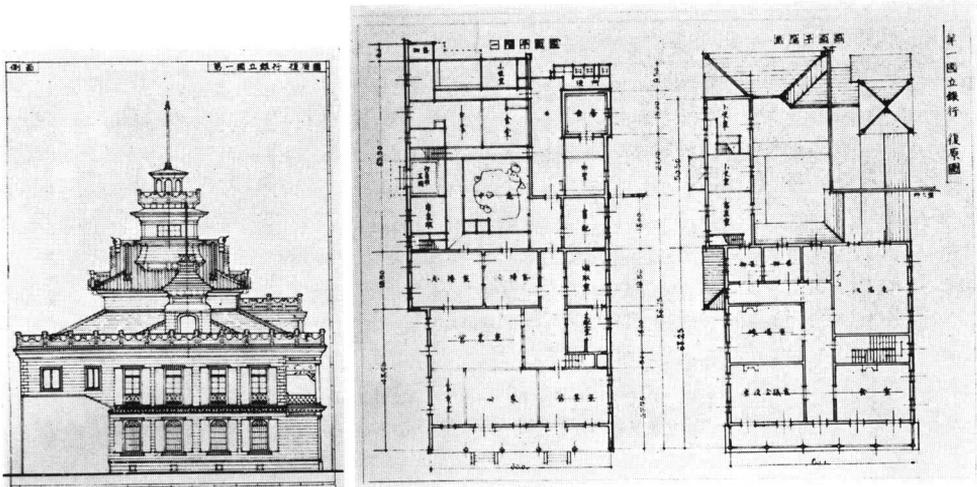


図 2 堀越三郎復元図

2. 資料的検討

前述の如く、本建築の大要は堀越による復元によって提示された。従ってここでは初田発見の三井文庫関係の資料を中心に、本建物について新しく判明した部分を中心に記す。⁸⁾

竣工時建物の状況を推定し得る基本資料となるのは、三井文庫所蔵の『兜町第一国立銀行総地繪圖』(以下『総地繪図』と呼ぶ)を中心とする数枚の間取り図,⁹⁾及び『式拾六職惣計勘定』『銅物御模様替御入用積り』などの仕様・積算を中心とした数件の文書資料である。¹⁰⁾この内、『総地繪図』に関しては初田による詳細な論証¹¹⁾により、竣工時の建築平面はほぼこの図面に示されたものであろうことが推定できる。即ち、堀越によって示された、建物奥部の防火壁は竣工時無く、金庫及び蔵は後にかなりの変更がなされたと考えられる。従って、本復元ではこの『総地繪図』を竣工時の一階平面として採用した。(図 3)

しかし、この『総地繪図』には2階部分が含まれていない。2階部分の復元においては、三井文庫資料中『海運橋銀行西洋造新築間数書』¹²⁾中の記述

「一、	間口 一間半	鑿蔵一棟	
	奥行 三間		
一、	間口 二間	石蔵二階建一棟	
	奥行 三間		
一、	間口 三間	同断一棟	」
	奥行 三間		

(傍点筆者)

などが見られ、これらの間口幅、奥行等を『総地繪図』に対応すれば、奥石蔵2棟が2階建であったことが推定できる。また、同書中の記述

「一、	間口 八間半	同断並式階建くら	」
	奥行 式間半		

(同)

については、これに対応する計画段階の図面が残され、¹³⁾これよりも窓割りその他を推定する事が可能である。(図 4)

『御用所新規御普請御入用式拾六職惣計勘定』(以下『式拾六職惣計』と呼ぶ)は明治5年5月に清

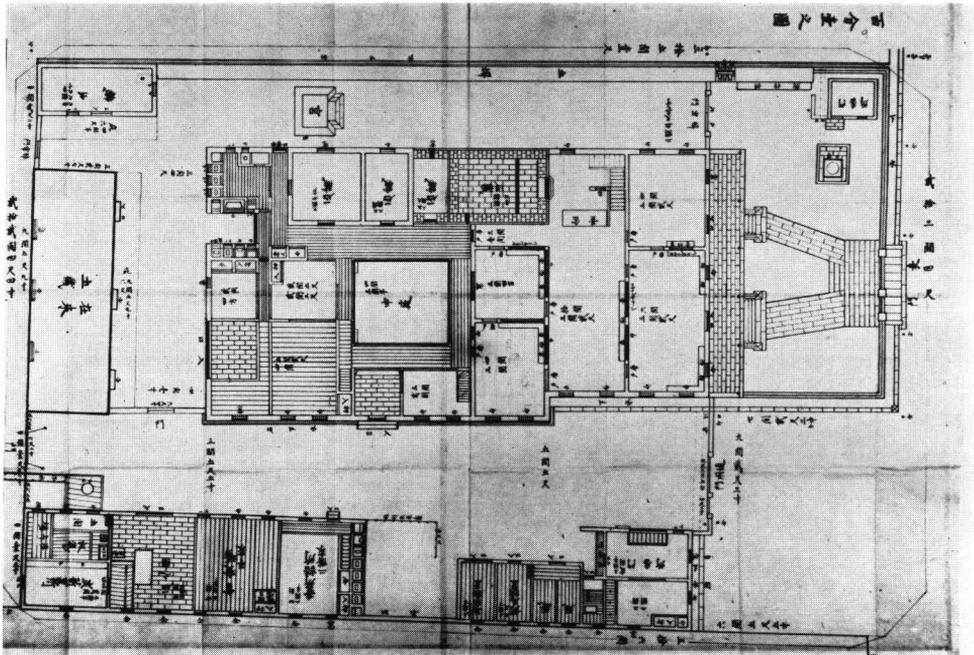


図 3 兜町第一国立銀行総地繪圖

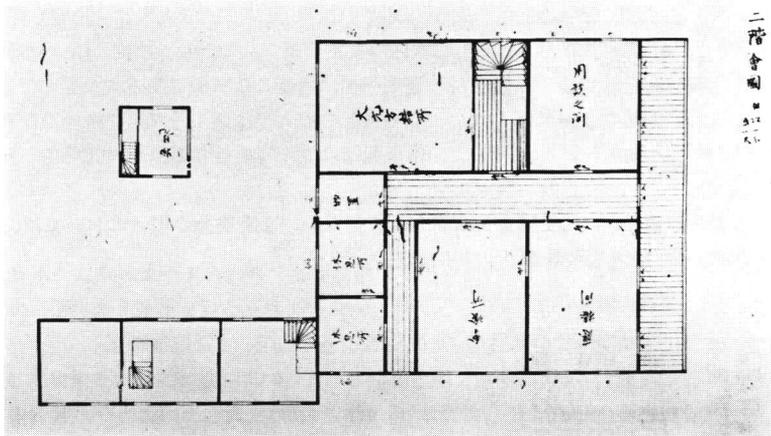


図 4 第 1, 2 回目二階, 物見平面図 (計画案)

水喜助より三井に提出された、言わば経費請求書であり、この内に各職の手間代、材料費、及び数量、仕様などが記されている。¹⁴⁾ 更に同年、正月及び3月に、屋根の仕様変更願いが出されこれに仕様が付けれられている。¹⁵⁾ この『武拾六職惣計』を中心とする資料より、本建物が如何なる材料によって造られたかどの様な仕様で建てられたかを推定することができる。『武拾六職惣計』中、今回の外観復元に使用した分は「石方惣計、鋳物代金惣計、木柄鉄物、壁方代金、家根屋惣計、建具方、銅代金惣計、

塗師方、銅家根方手間惣計、瓦方惣計」の各職の内容である。

この資料は基本的には請求書明細であり、適確に外観の意匠を知ることが出来ぬし、また実施段階で多少の変更を加えられた可能性もあるが、凡そ次の点を竣工時の本建築の状況とみることができる。

建物の外壁に貼られた石材は、正面蛇腹造の部分、二階下など、を青石壁とし、奥倉、鋳蔵の壁には房州石が使用された。

建物の外部金属材料は、銅・鉄・鍮・トタン、などが使用されている。この内、銅は前記仕様変更願いにも示される如く、瓦板を八角屋根他

「三階上之重唐波風千鳥波風家根……(中略)、腰家根唐草廻り共本葺銅瓦ニ御模様替云々……」

とし、前部西洋造部分は銅瓦で葺かれていた。更に腰屋根は

「銅板詠延百二拾目附極色好シの板きさみ下ニテ四方コハセ……」

とし、銅板によるコハセ葺きがなされている。これらの銅屋根は仕様によれば、黒ペンキで塗られていたとされる。¹⁸⁾

このうち鍮という材料名は特に鋳物方で多用されている。例えば、鍮丸柱二階ノ分¹⁷⁾、二階上水引¹⁸⁾、御金庫取り取り窓、表二階縁側手すり、窓てすり、二階下車欄間¹⁹⁾、若葉唐草持送り²⁰⁾、^{読めず}□儀亀持送り²¹⁾、風見屋倉家根上手すり、などである。この鍮²²⁾が如何なる材料を指すのかは断定はできぬが、森山の実測図中に描かれる材料名及び使用箇所との比較において、ブロンズと考えてよいであろう。

木柄職の積算及び仕様については、倉戸前、開口部箇所の仕様等との対応を、『総地絵図』を用い行うことができる。ただし、木柄職の関与した部分が全開口部か否かはこの積算書より判断することはきわめて困難であり今後の課題を残している。書中、

「水引模様鋳形並ニ絵師ニ払」

という記述があり、正面水引が絵師による下絵のもとに鋳出されたとの推測が成り立つ。

壁方については、内壁、廻り壁、軒蛇腹、等に分類されている。この内、外壁の仕上げに関連する廻り壁では、鋳蔵、奥蔵共外廻り壁、表石敷之間両妻、とされ、その仕様は、

「南蛮漆喰鹿の子ぬり荒木田越土致し付出し本中ぬりなで込上ねり白漆喰南蛮(中略)野露ヲ掛ケなで込磨き仕上げ」

とし、漆喰壁による仕上げとする。また、三階際外廻り、左右風見櫓の下部は石だたみ塗りとする。これら漆喰塗りの仕様は屋根庇、軒廻りなど細部にも及び、銅板、石壁以外の壁、軒廻りなどは漆喰で仕上げられていたことを物語っている。

塗師方の項目に関しては、銅物蘭間、鉄格子などの金物類はペンキ塗りとし、屋根にもペンキが塗られていた事を示している。その色については、鍮柱、持送り、鍮持送り、鍮水引、銅甲梁は

「鍮色にぬりハネシ仕上げ」

(傍点筆者)

とし、ブロンズ色のペンキが塗られていたと考えられる。更にここでは、銅葺屋根及び中坪庇、など屋根は黒ペンキで塗られたことが示されている。

次の「銅家根手間総計」の記述は、前述の外部金属材料で示した事項を裏付けている。ただし、ここには、

「鬼板鬼面共大小拵え、右打廻銅物拵え、」

「奥中坪庇シ鉄板張」

などの仕様が見られ、細部についての具体的な記述を捨うことができる。

瓦方に関しては、積算の内容より瓦葺の箇所を確認することができる。これによれば、奥蔵屋根、鋳蔵屋根、奥二階屋根、コック場、平家、など西洋造以外の部分は瓦で葺かれていたことを物語っている。

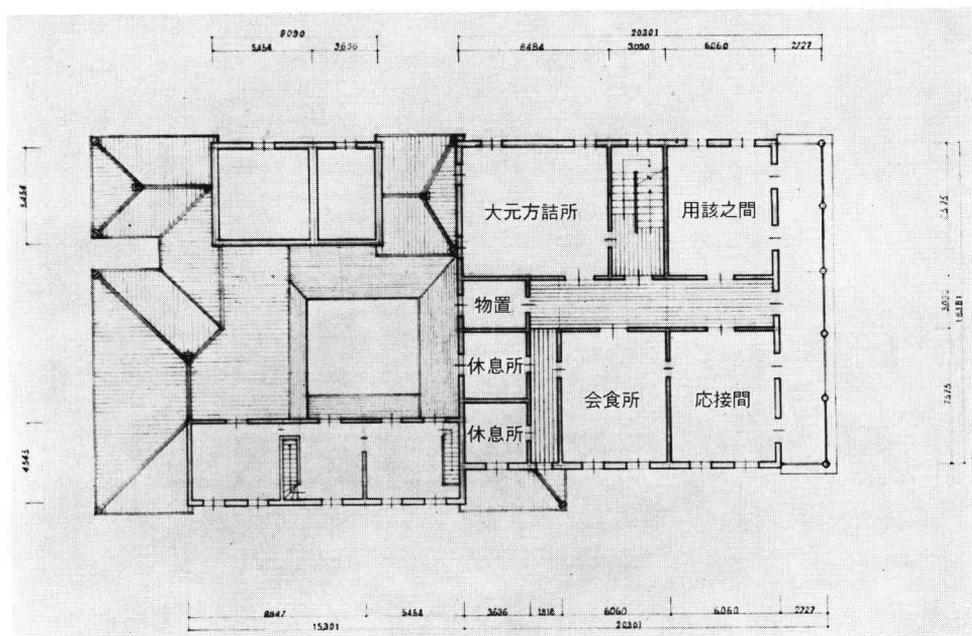


図 6 2 階平面図・屋根伏図。(室名は「計画案」を参考にした)

細部装飾については、通常錦絵等においては正確な状態は描写されず、かなりの誇張が含まれている場合が多い。現在知られるこの建物の正面の詳細を示す最も鮮明な写真は取壊し頃に撮された写真であるが、²⁴⁾ (写真 1) 改造後の写真の为一階部分の竣工当時の状況は不明である。本詳細部復元に関しては 2 階部分を主にこの写真により、一階部分を堀越も指摘する如く、最も状況を詳細に示し、かつ写実的であると言われる錦絵『東京名所海運橋五階造真図』²⁵⁾ を参考にした。更に上記『武拾六職惣計』による記述をも参考にし復元した。これによれば、前面部細部の銅及び鋳鉄物として、

「若葉唐草持送り、五ヶ所数十^{読めず}」「^{読めず}儀亀持送り」という記述があり、バルコニー 鋳物柱の上部持送りは、2 階部は若葉唐草、一階は^{読めず}儀亀と考えられる。以上の考察に基づき描いた復元立面詳細図が (図 7) である。なお、一階欄間部分の詳細については、以上の資料よりも不明であり、堀越の考察に準じ、無地のまま残した。

3) 屋根伏図 (図 6, 2 階平面図参照)

屋根伏図に関しては、森山による実測図があり、前面の西洋建築部分については、ほぼ正確な復元が可能である。奥蔵及び中坪等の和風建築部分については、2 階復元平面との対応、及び『武拾六職惣計』中の記述との対応についてとらえた。これによれば、奥部は概ね瓦葺きであり、中坪廻りの庇は鉄板葺きとされる。なお、銅葺屋根については前述の如くであり、屋根の仕様変更願ひ、積算書よりその形を決めることができる。以上の結果に基づき描いた屋根伏図は (図 6) の如くである。

4) 立面図 (図 8, 9)

立面図の作成にあたっては、以上の各図の結果に基づき検討を行った。特に、高さについては、堀越の論考による旗竿頂部までの高さ、約 140 尺を採用している。²⁶⁾ この結果前部西洋造り部分にあってはほぼ堀越の復元案に準じその細部を充実させる方法をとった。

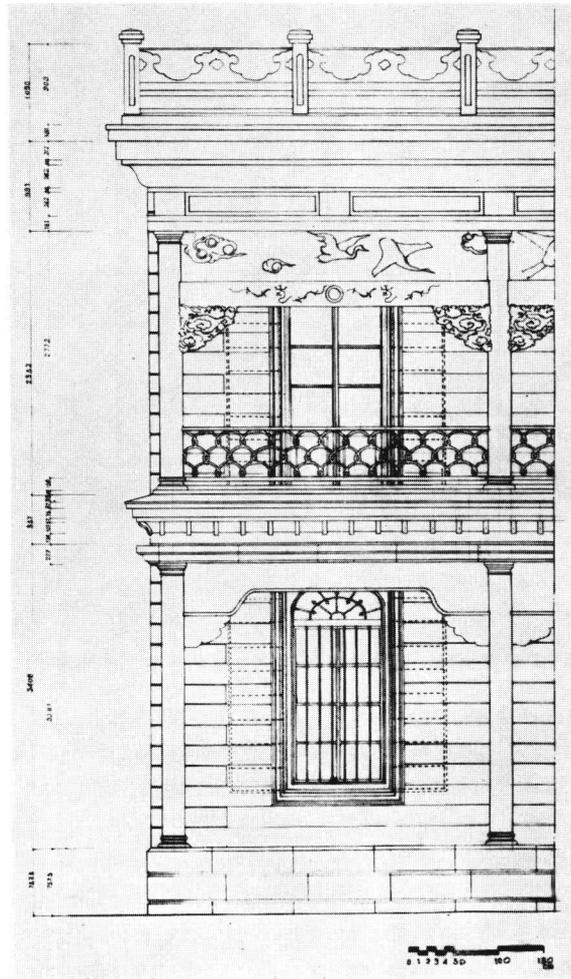


図 7 正面詳細図

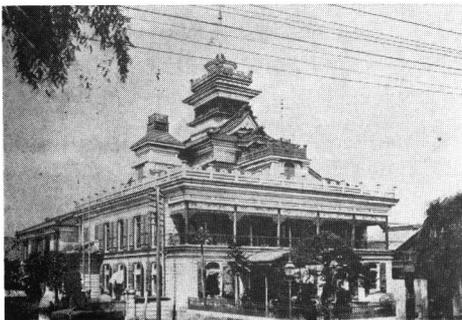


写真 1 取壊し頃撮影写真
 (『建築雑誌』 No. 140)

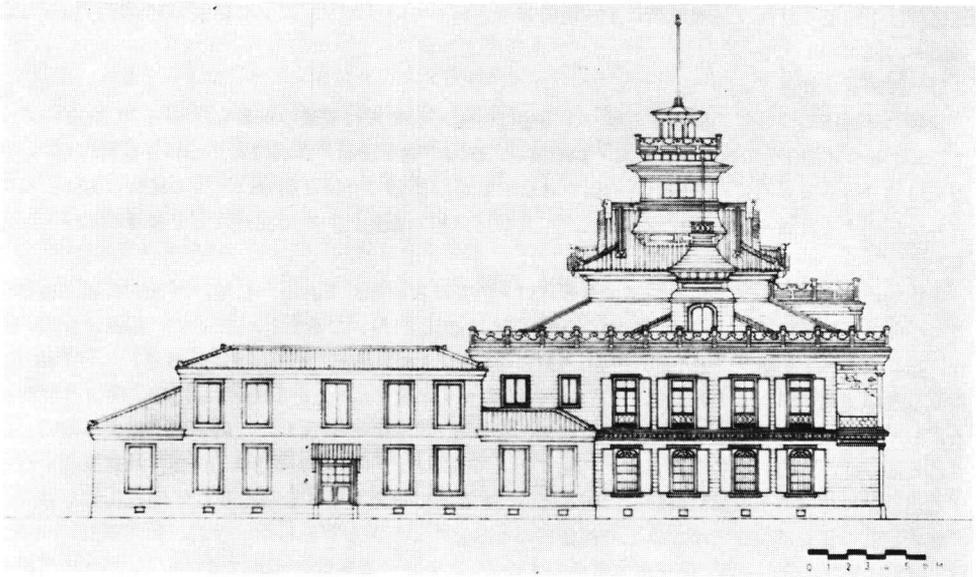


図 8 側面図 (正面に向き左側面). なお正面は堀越復元案に準じ略す

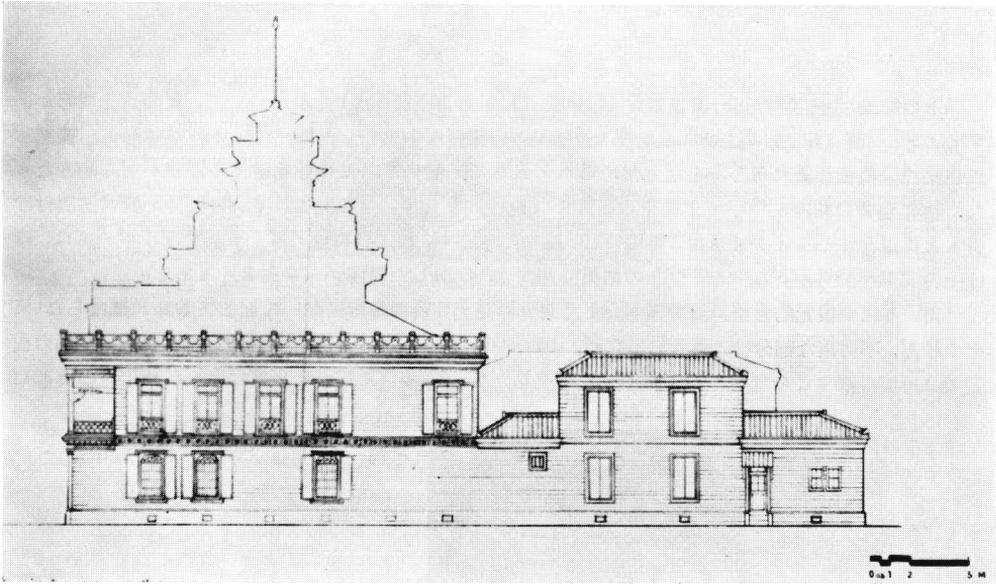


図 9 側面図 (正面に向き右側面)

奥部、蔵及び和風部分に関しては、写真及び、『式拾六職惣計』より検討を加え、立面図を製作した。しかし、特に最奥部入口、窓等については、これらの資料よりも推定する事は困難な箇所もあり、同時期の同種建築の詳細を参考として復元的考察を加えている部分もある。特に資料的検討の困難であっ

た箇所は中坪廻り立面，最奥部入口及び便所等の窓廻りであった²⁷⁾。以上の結果に基づき作製した立面図が(図 8, 9)である。

5) 詳細及び着色

建物の詳細部について，現存する唯一の実物は，第一勧業銀行所蔵の銅製鬼瓦のみである。従って，本建築の詳細部分の推定は，写真・錦絵及び，森山の側面部部分詳細図より行わざるを得ない。本復元は知り得る限りの資料を用い詳細部を考察したが，詳細の不明な部分は，この建物の細部装飾に三井に関する紋様が使用されている点，²⁸⁾ 及び『武拾六職惣計』中の記述などを参考にしつつ復元した。

本建物の着色に際して，現在推定できる材料・色彩は次の如くである。石壁，青尺六石極上物布目立て小叩き，及び房州石，軒蛇腹，漆喰塗(野露掛け磨仕上げ)，二階上下，三，四階，銅物，蘭間，鉄物，額縁共，ペンキ塗り(色不詳)甲梁，鏝柱，持送り，水引など，鏝色(ブロンズ色)ペンキ塗り，銅屋根及び鬼瓦の類，黒ペンキ塗り，土台等西洋黒チャン塗り，以上が『武拾六職惣計』等より判明せる部分である。以上の他の着色に際しては錦絵を参考としながら着色した。特に窓上部の車欄間と記される部分は，大方の錦絵が，色ガラス貼りとして描かれ，²⁹⁾ これは同期の他の擬洋風建築とも符合する当期洋風建築の一般的装飾形態である故に，本建築の復元もこれを参考とした。

建物細部の色彩については，以上の他錦絵等を参考にしながら着色した。なお，製作模型については，屋根は黒色に着色せず，銅色にて着色している。これは一般観覧者の観点に立てば，模型の屋根を黒塗りにした場合，本瓦葺きと理解する恐れがある故で，この部分は使用材料を明瞭にする為あえてこの色にて着色している。

ま と め

以上の結果，竣工時の第一国立銀行(海運橋三井組為替座御用所)の姿について，次の点を明らかにすることができた。先づ従来の研究では前部西洋造部分を中心とした復元が成されていたが，後部和風建築部分の姿が概ね明らかとなった。これによって，始めて，この建物総体の形状が明らかとなった。次に建物の細部について，従来の研究では錦絵，写真等より復元されていた部分が資料的裏付けのもとに復元することができた。特に，この建物の意匠中，最大の特徴と言える前面部については，ほぼその実態が明らかとなった。以上の結果に基づき，作製した模型が(写真 2)である。

一方，今回の復元的考察に於いても，まだ十分に確認し得ぬ部分について記しておかねばならない。その最も，不明確な部分は，最奥部の立面，中坪周囲，及び正面より右側面鏡蔵以降である。今回の復元では可能な限りこの部分の竣工時の姿を考察したが，今後更に詳細な研究によって竣工時の実態に

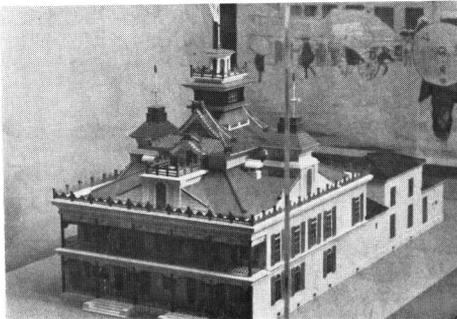


写真 2 旧第一国立銀行模型

近い形態に修正する必要が残されている。またこの部分は窓割り等において、写真その他の資料と平面図との間に相違が生ずる箇所もあり、かなりの誤差を生じている可能性もある。

以上、本論文の主要目的である復元方法及び結果について記した。これによって、本論文の目的は達せられたが、研究を通じて知り得た 2, 3 の事項について触れておきたい。本建築は日本人の工匠が、西洋建築が未だ本格的に導入される以前、伝統的な建築技術を駆使し、建設した洋風建築であると言われている。今回の研究によって建築材料、建設技術、西洋建築装飾に対する理解などの諸点も従来よりの方法を用い建設されていたことが、外観構成上において確認できた。特に建築装飾に対する理解は現在の装飾観より見れば、はなはだ特異であり、正面を例にとれば、オーダーを中部に若葉唐草装飾の持送りを付け、更にその上に水引き、欄間、軒蛇腹と伝統的な和風建築の細部にあてはめ、理解するという方法がなされている。また、これらブロンズの上に同色のペンキをぬり、また銅屋根上に黒ペンキをぬるなどの仕様がなされている。このように本建築の外観意匠は西洋建築の部分的な模倣では無く、西洋建築様式あるいは細部装飾を伝統的な和風装飾法に翻訳し理解し直し、再構成したものである。また、前面部の西洋造りの部分と後部の和風部分は、復元模型よりも理解する事ができる様に、全く異質な表現では無く、一応のまとまりを持った外観で設計されていた事が分る。以上の如く本建築は江戸末期より明治初頭にかけて、日本人工匠が如何なる建築技術を用い西洋風建築を建設したか、また如何なる装飾観のもとに外観の形態を決定したかを知る貴重な建物と言えよう。

本研究及び復元図作製にあたっては、草稿の段階から工学院大学初田亨氏に資料などにおいて貴重な助言と多大な協力をいただいた。末尾ながら感謝申し上げたい。

註

- 1) 『明治工業史』建築編, 工学会 昭和 2 年 p. 25.
- 2) 本建築の近代建築史上の位置については、初田亨『都市の明治』1981 年, 筑摩書房に詳しい。
- 3) 『建築雑誌』140 号, 森山松之助実測, なお, 堀越三郎『明治初期の洋風建築』昭和 4 年, 丸善, p. 33. によれば, 「此の建物は明治初期より東京名所の一として, 絵画に写真に其の形貌を伝えられたる有名なものなり。明治 17 年来朝せし独逸建築技師エンデ及びビヨックマン兩人も之を觀て感嘆措からざりきといふ。其の將に取毀せんとするや工学博士辰野金吾いたく之を惜み『明治初年の洋風建築が邦人の手に依って創作されたる好個の記念物として, 浅草あたりに移して保存し度し』と語りしと伝ふ。」と記されている。
- 4) 前掲, 堀越三郎『明治初期の洋風建築』なお, 本復元には数多くの写真及び錦絵が使用されている。
- 5) 第一銀行, 『第一銀行史』上巻「東京ノ一名物タリシ第一銀行ノ建物ハ明治三十年取毀ストコロナル。ソノ復原図ハ堀越三郎著『明治初期の洋風建築』ニ詳ラカナリ」。また堀越の復元に基づき, 本建築の鋳造復元模型が製作されている。昭和 5 年 7 月銘。
- 6) 本資料については, 初田亨「海運橋三井組為替座御用所の建築について」『日本建築学会論文報告集』第 253 号, 昭和 52 年 3 月, において三井文庫所蔵資料を中心とした研究がなされている。本復元においても, この初田発見の資料に拠るところが大きい。
- 7) 本建物の復元が外観を中心とされたのは, 内部についての写真等がほとんど残されていないという理由にもよる。
- 8) 堀越の復元案は前部の西洋造り部分を中心としている。本研究では後部和風建築部分, 及び前部の詳細を中心に検討を加えた。
- 9) 三井文庫蔵, 『海運橋御用所総地繪圖』〔無銘〕第一回目正側面図, 第二回目正側面図, 第一, 二回目一階平面図, 以上は同文庫, 『海運橋御用所會圖面』清水喜助〔海運橋御用所繪図面ノ内〕, 明治 4 年, に含まれる。本図についての論考は, 前「海運橋三井組為替座御用所の建築について」で行われている。この『総地繪圖』を実施図とする。

- 10) 三井文庫蔵『銅物御模様替御入用積り』, 清水喜助〔西洋普請諸書受入之内〕の綴中, 『海運橋御用所新規御普請三階上之重唐波風ノ千島波風家根并四方腰家根唐草廻り共本葺銅瓦ニ御模様替御入用積書』(壬申, 正月), 『御家根銅葺ニ御模様替仕様積書』(壬申, 三月六日), 及び, 同文庫蔵『御用所新規御普請御入用式拾六職惣計勘定』(明治五年, 壬申五月)が主要資料である.
- 11) 前掲『海運橋三井組為替座御用所の建築について』
- 12) 三井文庫, 前〔西洋普請諸書受入之内〕『海運橋銀行西洋造新築間数書』.
- 13) 前掲〔海運橋御用所絵図面〕中.
- 14) 前掲, この書式は先ず各職毎の費用及び全体の総計を述べ, 次に「杉丸太松丸太之部, 一, 百五拾五本, 長杉丸太式寸五分代金云々……」という記述方法がとられ, 各項目の必要箇所に仕様が載せられている.
- 15) 前掲, 『銅物御模様替御入用積り』他.
- 16) 以上屋根葺材に関する部分は, 前掲『銅物御模様替御入用積り』他の仕様変更願いによる.
- 17) ファサードの一階及びバルコニに付けられた柱を指すと思われる.
- 18) 柱上部の鋳物製はりを指すと推定する.
- 19) 窓上部, アーチ型窓を指すと推定する.
- 20) 柱中部鋳物製持送りを指すと推定する.
- 21) 意味不明なるも, 一階柱中部の持送りを指すと推定できる.
- 22) 鍔の字義はブロンズを指すとは限らぬ. 諸橋職次『大漢和辞典』昭和 34 年 卷 11. p. 607 しかし, 森山松之助実測詳細図に記されている材料名などから見て, 鍔を青銅にあてたものである. また合成字とし, からかねと読むという説もある.
- 23) 森山の実測窓幅により防火戸を付ければ左右窓の防火戸が重り合う状態となり, 写真資料より判断出来る状態と異なる.
- 24) 前掲『明治初期の洋風建築』にはこの建物を写した様々の写真が載せられている. しかし, それらも建物細部については不鮮明であり, 現在知られる最も鮮明な写真は『建物雑誌』140号掲載の取り壊し頃の写真であろう, 同一ネガより引きのばされた写真として三井文庫所蔵写真が一層明瞭である.
- 25) 三井文庫蔵『東京名所海運橋五階造真図』一曜齋国輝画, 伊勢屋兼吉板明治5年, 大三枚続, 堀越はこの錦絵を「信拠す可きものとす。」とする. 前掲『明治初期の洋風建築』p. 33.
- 26) 前掲『明治初期の洋風建築』p. 37
- 27) 特に最奥部, 及び正面に向い右側面奥蔵の詳細が確定できない. これに対してはこれら奥部を和風蔵造りを基調とすると考え, 東松家その他の窓廻り仕様に順じた. しかしこの部分の詳細については今後の研究が必要であろう.
- 28) 井桁くずし, ゐの字くずし, 四つ目, などは堀越に指摘されているが, 水引上の旨も三の古文よりの意匠である. この左右の文様を雨龍と言う. 『式拾六職惣計』中の仕様.
- 29) 前掲国輝『東京名所海運橋五階造真図』同『海運橋銀行〔東京府下自慢競の内〕』浅草大黒屋金三郎板『東京名所ノ内海運橋兜町三井為替座五階造之真図』他, なおこの車欄間は東村山郡役所(明治12年)の形式を参考とした.